

実践報告

看護大学生と地域住民が協働で取り組んだ健康づくり —官民学のコラボレーション企画(第2報)—

滝澤 寛子*・井上 深幸*・河田 志帆*・石井 敦子*

Key Word：健康づくり、生きがい、地域住民、大学生、協働

I はじめに

本学では2018年のヘルシーキャンパス宣言以降、健康に関するさまざまな取り組みを行ってきた。その取り組みの1つとして、2021年、大学が所在する行政区と地元小学校区の住民との協働による健康づくりの企画に取り組んだ(高城ら, 2022)。本企画は、2020年に締結した大学が所在する行政区との包括協定によって実現した。初年度の取り組みは、住民にとっては歩く習慣への動機づけや交流の機会となり、学生にとっては住民との関わりの中で看護学生として大切な姿勢や視点を学び、それを今後活かしていこうとする意欲を高める機会となっていた。学生の活動を通して看護学の教育成果を地域に還元する取り組みは、社会貢献活動としての位置づけと、学生の成長の機会となることが確認できた。2022年12月には、本企画が「健康長寿のまち・京都いきいきアワード2022」の大賞を受賞した。

今年度は、昨年度の企画の成果を踏まえて、企画の枠組み整理と評価指標の検討を加えた。2年目の実践内容と結果について報告する。

II 企画の概要

1. ヘルスプロモーションの概念からみた企画の枠組み

昨年度の取り組み結果を踏まえて、本企画をWHO(1986)のヘルスプロモーションの概念から整理した(図1)。本企画の取り組みは、「看護学生と住民が、ともにウォーキングチャレンジの目標に向けて取り組む中で、自らの健康とその影響要因に関心を向け、より健康で豊かな生活の実現に向けて取り組むようになるプロセス」であるといえる。ヘルスプロモーションの5つの活動戦略としては、ヘルスサービスの方向転換としての「区のまちづくり担当部署や地元小学校区との連携」をスタートに、個人技能の開発としての「看

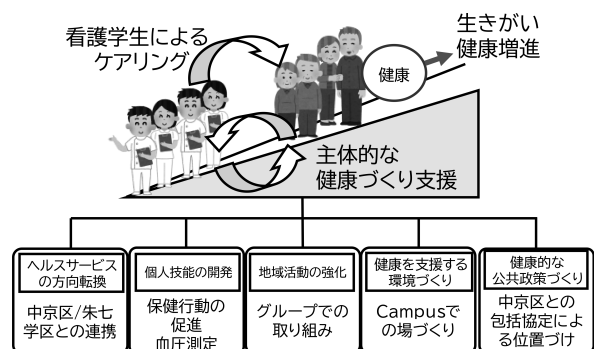


図1 ヘルスプロモーションの概念からみた企画の枠組み

* 京都看護大学

護学生によるケアリングと、血圧測定やミニ健康教育等による個人の保健行動促進への働きかけ」に加え、個人の主体的な健康づくりの支援を「住民と学生によるグループでの取り組み」により後押しした。健康を支援する環境づくりとして「大学キャンパスでの場づくり」、健康的な公共政策づくりとして「区との包括協定による位置づけ」が該当すると考えた。

2. 授業科目の中での位置づけ

昨年度同様、2年次後期の公衆衛生看護学（1単位、15コマ）の中で実施した。科目の到達目標および15回のスケジュールと内容は表1の通りである。本科目において、本企画は、担当した住民

への保健行動を促す関わりを通して、支援関係構築の基盤や、地域で生活する人々の健康と生活・社会環境の関連について具体的に学修する機会とした。そこでの学びをもとに、個人の健康づくりから、公衆衛生看護の目的達成に向けた地域づくりへの展開を考える学習展開を行い、保健師の役割を考察できるよう工夫した。実際に自分たちが関わった住民の生活実態をもとに考えることで、学生は関心をもちやすく主体的に取り組む姿勢が見られた。さらに地域の健康づくりを考えるヒントを提供することで、住民から教えてもらった地域の強みや資源を活用し、地域の特定の集団や様々な人々を巻き込んだ健康づくり活動を考えることが可能であることを確認できた。

表1 公衆衛生看護学の到達目標とスケジュール

到達目標	1. 公衆衛生看護の理念と目的について説明できる。 2. 地域で生活する人々の健康と生活・社会環境の関連について具体例を用いて説明できる。 3. 個人の保健行動を促す教育的アプローチの展開方法について説明できる。 4. 看護師と保健師の役割、活動方法の共通点・相違点について述べるができる。 ※企画では主に到達目標 2, 3 を学修する	
回	日程	内容
1	10/6	ガイダンス ・公衆衛生看護とは ・主体的な健康づくり ・地域を知るために
2	10/13	保健行動を促す教育的アプローチの展開 ・保健行動を促す教育的アプローチの展開方法 ・健康教育の媒体 GW: アイスブレイク/ 地区はどんなところ? 事例 Aさんへのアプローチ/ 媒体・表紙のアイデア
3	10/20	保健行動を促す教育的アプローチ 動機づけと目標設定 ロールプレイ: 動機づけと目標設定 ・血圧測定の手技確認・結果のフィードバック方法 ・健康教育媒体の確認修正
4	10/27	保健行動を促す教育的アプローチの実践① ・本日の企画・流れ確認 ・アイスブレイク GW: 目標設定/ 血圧測定
5	11/10	保健行動を促す教育的アプローチの実践②③④ ・本日の企画・流れ確認 GW: 振り返りと次回までの目標設定/ ミニ健康教育 / 血圧測定(毎回)/ 骨密度測定(期間中1回)
6	11/17	
7	11/24	
8	12/1	保健行動を促す教育的アプローチの評価 ・本日の企画・流れ確認 GW: 1か月の振り返り ・感謝式
9	12/8	公衆衛生看護の理念と目的
10	12/11	ヘルシーキャンパスフォーラム
11		
12	12/15	公衆衛生看護と地区組織活動
13	12/22	公衆衛生看護における政策化
14	1/12	公衆衛生看護活動の展開
15	1/19	健康なまちづくり

【注】①GW はグループワークを指す。

②第 4～8 回が住民との協働活動である。

3. 昨年度の結果を踏まえた今年度の企画内容

住民との協働活動は授業スケジュールの第4～8回の計5回である（表1）。企画内容は昨年度の内容を踏襲しつつ、その結果を踏まえて一部修正、工夫を加えた。以下、修正、工夫した点について記載する。

1) 住民の参加について

昨年度、欠席者や辞退者が出たことにより、住民不在でのグループ活動や、1名の住民に学生グループ2つを担当いただくことが必要となる状況が発生していた。今年度は、この状況を回避するため、事前打ち合わせの段階で、小学校区の自治会等役員より「グループ数より多めの人数を募集しておいて、欠席のあるグループには代わりの住民が参加できるようにしたらどうか」と提案があり取り入れた。

2) 実施内容の追加

学生の学習効果や昨年度の住民の反応を踏まえて、区・近隣病院の協力を得て骨密度測定を追加した。

3) 住民との交流・保健行動を促す働きかけの準備学習

既習の保健行動理論の活用を促す目的で、事前学習として、既習の保健行動理論について復習する動画を視聴し、模擬事例Aへの支援方法を考える課題を課した。授業では、グループワークで考えを共有しながら事例Aへの支援計画を立て、支援者役・対象者役を各自体験するロールプレイを行った。さらに、ロールプレイに先立ち、コミュニケーションの基本を講義し、自分の言動が相手にどう受け止められたか、対象者の生活実態や思いを引き出す関りができたかを振り返り、実践に向けてイメージづくりを行った。

また、住民の生活の理解を促す目的で、既存資料等から住民が生活する地域について調べ、そこから住民の生活の様子を推測する課題を課した。グループで住民の生活の様子を共有し、担当する住民の生活について様々な想定をもって実践に向けた準備ができるようにした。

ミニ健康教育は、「ウォーキング」「血圧」「骨密度」の3つのテーマを設定し、学生が1つずつ分担し、担当するテーマの媒体の作成と媒体を用いたミニ健康教育を実施することとした。健康教育媒体の作成では、活用できる知識の情報源を検索する課題を課し、各自が集めた情報源を集約し全体に共有した。共有時には、情報の信頼性を吟味して活用することの重要性を説明した。教育媒体の種類とねらい、作成におけるポイントを講義し、各自が作成してきた教育媒体案をグループで見直し改善を図った。媒体の作成を通じて、担当する住民の身体機能や生活実態にあうか、何をねらって実際にどのように説明するかを考えて実践できるよう個別に確認も行った。

4) グループでの取り組みの促進

授業開始がオンラインとなったため、グループのメンバーシップを高める目的で、絵画を使った自己紹介のアイスブレイクを取り入れ、メンバーの相互理解を促した。住民との協働が始まる初回にも、文字合わせゲームのアイスブレイクを取り入れ、グループの関係づくりを支援した。

今回、グループでの取り組みを意識して取り入れていくため、評価ブックをチャレンジブックと名称を変え、チャレンジ初回に個人の目標だけでなく、グループの目標を決めて記載するように変更を加えた。

チャレンジ3週目には、チャレンジ2週間の全員の合計歩数の報告を行った。歩数を距離に換算し世界地図で移動距離を可視化し、個人だけではなく、教室全体の成果を実感してもらいウォーキングの実践と継続への動機づけを図った。

4. 本企画の評価指標の検討

本企画の住民および学生を対象とした評価指標を検討した。ヘルスプロモーションの概念からみた企画の枠組みと、昨年度のアンケートの自由記載等から、企画の効果を抽出した。

住民の企画への参加による効果として「生きがい」と「健康増進」を取り出した。長谷川ら(2004)

の「生きがい」の構成要素を参考に、生活充実感、安らぎ感、自己実現、効力感、生きる意欲、健康増進への意欲を尋ねる7項目と負担感を尋ねる1項目の計8項目を作成した。

学生の学習効果については、本企画が学生にとって、1授業科目としての学修に留まるのではなく看護専門職としての今後の学修への継続性を有するものであることから、本学の実践能力の到達目標を参考にした。看護師の実践能力「ヒューマンケアの基本的な能力」から3項目、「健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復にかかわる実践能力」から2項目、「ケア環境とチーム体制を理解し活動する能力」から2項目とグループで取り組む効果の理解を加えた計8項目を作成した。

5. 評価のためのアンケートの実施

本企画の評価および報告に使用することを目的として、本企画の終了時に、住民および学生それぞれにアンケートを実施した。アンケートの実施にあたっては、協力は任意であり、協力しない場合でも不利益は生じないこと、学生においては成績などの評価には一切影響しないことを加えて、文書および口頭で説明し、匿名で行った。

住民対象のアンケートの項目は、上記の企画への参加によって期待される効果の8項目のほか、参加のきっかけ、企画で良かった内容、感想とした。学生対象のアンケートの項目は、上記の期待される学習効果の8項目のほか、協働活動の満足度、学びになった内容、健康意識の変化、今後の学修に活かせること、健康に生活を送る上で活かせることとした。なお、学生の成績評価はこれら指標を用いていない。

Ⅲ 結果

1. 住民の参加状況・参加のきっかけ

住民の参加は、実数32名（延べ148名）で、その内訳は男性15名、女性17名、平均年齢77.0歳（63歳～90歳）であった。疾病の為2回目以降の辞

退者が1名おられた。その他の欠席理由は、法事、発熱、予防接種などであった。事前打ち合わせの内容を踏まえて、1グループに対し住民2名グループに自治会等役員メンバーを編成し、辞退者がでたグループに移動してもらう形をとることができた。参加者が欠席の場合は、1週間の記録を記載したチャレンジブックを自治会等役員に託けて教室にもってきてもらい、学生からのコメントを記載したものをご本人に返すようにし、期間中、グループで継続した取り組みを行った。

今年度の参加のきっかけを尋ねた結果では、「知人からのお誘い」12名（41.4%）、「去年も参加して楽しかった」9人（31.0%）、「面白そうだったと思った」8名（27.6%）の順だった（図2）。昨年からの継続者が約3割を占めた。

2. チャレンジ期間中の歩数

ウォーキングチャレンジ30日間の住民31名および学生98名の合計歩数は33,831,444歩、1人1日平均8,742歩であった。住民と学生それぞれ1人あたり1日平均歩数を算出した結果を図3に示した。住民が立てた個人の目標は、各自の体力等に応じ3,000歩から15,000歩と幅広く、最初の2週間の1人1日平均歩数は7,998歩、3週目は6,594歩、4週目は7,051歩であった。学生の1人1日平均歩数は、最初の2週間で7,606歩、3週目が7,865歩、4週目が8,400歩であった。

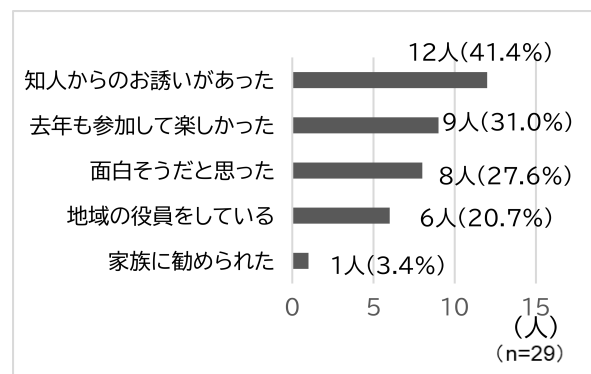


図2 参加のきっかけ（複数回答）

3. 住民および学生による企画内容の評価

住民に企画で良かった内容、学生に企画で学びになった内容をそれぞれ複数回答で尋ねた結果を図4、図5に示した。住民にとって良かった内容は「学生との交流」27名（93.1%）、「学生が作成した健康に関するチラシ」22名（75.9%）、「骨密度測定」22名（75.9%）、「血压測定」15名（51.7%）の順であった。学生においては、全ての項目で8割以上の学生が学びになったと答えており、「住民との交流」91名（100%）、「健康に関する教育媒体の作成と活用」82名（90.1%）、「骨密度測定」80名（87.9%）、「チャレンジブックの活用」78名（85.7%）の順であった。

学生の住民との協働活動への満足度は「とても満足」89名（97.8%）、「まあまあ満足」2名（2.2%）

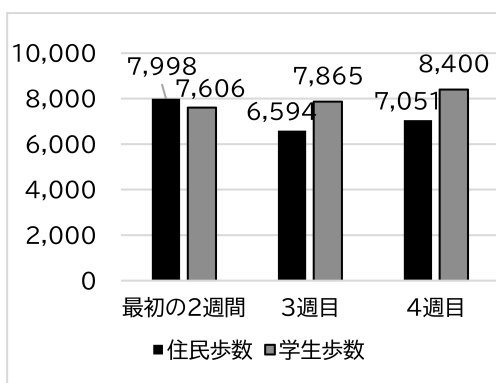


図3 1人1日平均歩数

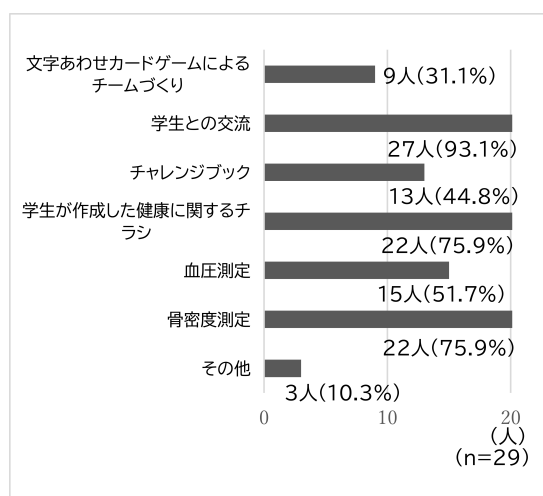


図4 住民による良かった企画内容（複数回答）

であり、「やってみたかったこと」を自由記載で尋ねた結果では「一緒にウォーキングをする」が26件中13件あった。住民の感想の中にも「一緒に歩きたかった」といった記載が4件あった。

4. 企画への参加による期待される住民への効果

本企画の住民を対象とした評価指標として作成した8項目について、「とても思う」「まあまあ思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4件法で尋ねた結果を図6に示した。「とても思う」「まあまあ思う」をあわせると、『生活のほりができた』27名（93.1%）、『自分の話したことを受けとめてもらえて嬉しかった』28名（96.6%）、『健康のことを気兼ねなく聞いたり話したりできて安心した』27名（93.1%）、『学生に何かしてあげたい気持ちがあった』26名（89.7%）、『これからも色んなところに出向きたいと思った』28名（96.6%）、『ウォーキングを生活に取り入れようと思う気持ちが高まった』26名（89.7%）で、ほぼ9割の人が「思う」と回答していた。一方で『自分の知識や体験を学生のために役に立てることができた』は「とても思う」8名（27.6%）、「まあまあ思う」12名（41.4%）、『負担になる気持ちがあった』が「とても思う」「まあまあ思う」あわせて5名（17.2%）いた。

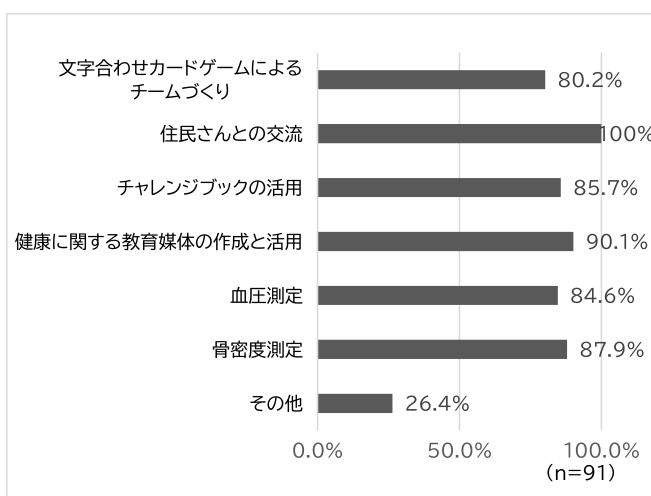


図5 学生による学びになった企画内容（複数回答）

5. 学生への学習効果

本企画の学生を対象とした評価指標として作成した8項目について、「とても学べた」「まあまあ学べた」「あまり学べなかった」「全く学べなかった」の4件法で尋ねた結果を図7に示した。全ての項目でほぼ全員が「とても学べた」「まあまあ学べた」と回答している。「とても学べた」が多かったのは、『住民を尊重する姿勢をもって接する』83名(91.2%)、『グループで取り組む効果を理解する』81名(89.0%)、『住民の生活背景を理解する』73名(80.2%)の順だった。一方、『住民の健康の保持増進・疾病の予防を支援する活動について関心を持つ』、『住民が健康への意識を高め行動変容できるための支援を行う』、『住民さんと協働することを楽しみ、看護活動を実践する』、『安全な環境をつくる』の項目は「とても思う」が74~78%で、8割に達しなかった。

「今後の学修(他の科目や実習も含む)にどのように活かしていけるか」を自由記載で尋ねた結果、【尊敬の気持ちをもって思いや悩みに寄り添うこと】【コミュニケーションのとり方】【対象の生活や生活背景の理解】【地域での生活の理解】【健康づくりの支援方法】【血圧測定技術】【協働する意義】の内容を抽出できた。具体的な学生のコメントを抜粋したものを表2に示す。

「自分が健康に生活を送る上でどのように活かせるか」を自由記載で尋ねた結果、【高齢者の姿勢からの学び】【仲間存在の大切さ】【ウォーキングの意義】【継続する重要性】【生活習慣を整える】【健康情報を得る方法と活用】の内容を抽出できた。具体的な学生のコメントを抜粋したものを表3に示す。

健康意識が高まったかの質問には、「とても高まった」64名(70.3%)、「少し高まった」26名(28.6%)、「あまり高まらなかった」1名(1.1%)であった。

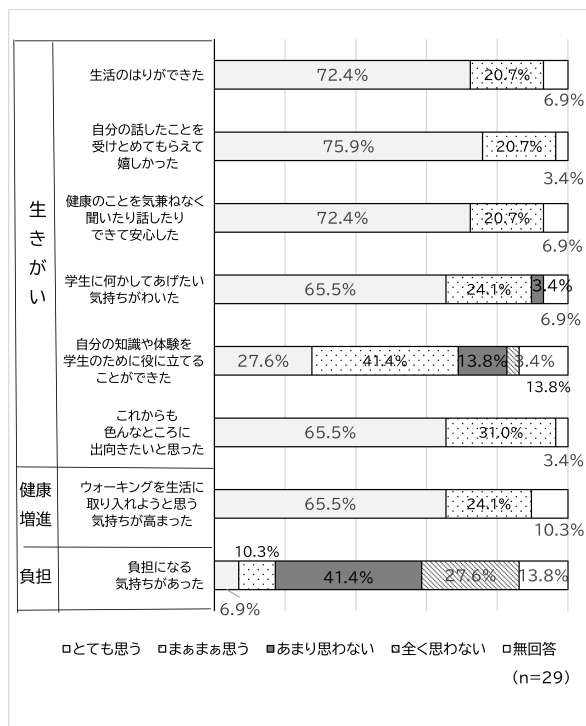


図6 住民の学生との交流への思い

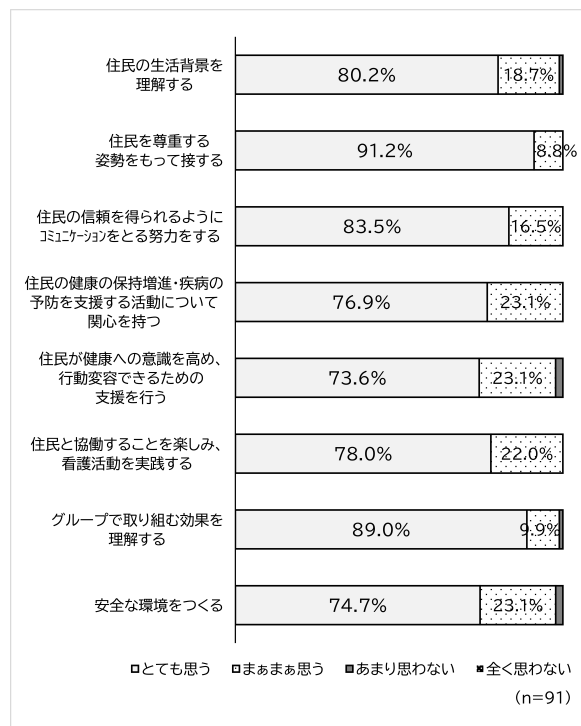


図7 学生が協働活動を通じて学べたこと

表2 今後の学修にどのように活かしていけるか（学生自由記載抜粋）

尊敬の気持ちをも って思いや悩みに 寄り添うこと	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての授業で他者を思いやる気持ちや関わりの姿勢で活かせる ・住民さんの悩みに寄り添い、今悩んでいることをどのように解決していけばよいかを考えることが実習でも活かせる
コミュニケーションの とり方	<ul style="list-style-type: none"> ・聴くという技術がとでもついた。実習にも活かせる ・目上の方とのコミュニケーションのとり方の工夫やお話の話題など実習に活かせる
対象の生活や 生活背景の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の特徴や生活の背景がその人にとってどのような影響をもたらしているのか、今後の学習を進めるにあたって重要な視点だ ・会話の中で学んだ生活スタイルや骨密度や血圧測定の結果は今後患者さんのアセスメントなどをする時にどのような生活をしているか興味をもって着目する事ができる
地域での生活の 理解	<ul style="list-style-type: none"> ・地域で様々な活動をしていること ・退院した後地域でどのような生活をしているのかを想像することや必要なサービスを考えること
健康づくりの支援 方法	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の住民さんがどのような生活を行い、運動量がどれくらいなのかということを知ることで、必要な支援について考えること ・対象の方の生活や価値観を大切にしながら共に考えていく準備が今後活かしていける
血圧測定の技術	<ul style="list-style-type: none"> ・住民さんとのコミュニケーションや、血圧測定など実習で活かせる ・高齢者の方の血圧を測ることに活かせる
協働する意義	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで取り組む意義を理解できたため今後積極的に参加したい

表3 自分が健康に生活を送る上でどのように活かせるか（学生自由記載抜粋）

高齢者の姿勢から の学び	<ul style="list-style-type: none"> ・住民さんは少し高齢の方だったのにも関わらず、毎日とても元気に歩いていらっしやっただけで私も歩こうと思った ・お年寄りの方のほうが健康的な生活をなされていて若いときに健康的な生活をしていないと歳をとったときにしんどいと教えていただいたので健康的な生活を送るモチベーションになった
仲間の存在の 大切さ	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒にやることで意識が高まり頑張れること ・ウォーキングを仲間と共にすること
ウォーキングの意義	<ul style="list-style-type: none"> ・ウォーキングをすることで気持ちが向上したり、生活の健康レベルが上がると考えたため活かしたい ・歩くということがいかに健康を維持する上で大切かということを学び、歩くためには生活習慣を整えるということも求められるので、ウォーキングをするだけで、生活の質が高まることを学んだので今後活かしたい
継続する重要性	<ul style="list-style-type: none"> ・住民の方に「継続は力なり」の意味を住民さんの歩数記録によって教えていただいたので自分も色々な場面でその言葉を大事にしたい ・継続が大切だということ。継続するための工夫も学ぶことができた
生活習慣を整える	<ul style="list-style-type: none"> ・健康に対する意識が高まったので食事や運動に気をつけたい
健康情報を得る方 法と活用	<ul style="list-style-type: none"> ・健康教育のための教育媒体の作成が、自分の持っている知識が本当に正しいかどうかを確かめる機会となり、自らのヘルスリテラシーを高めることに繋がったと考える。健康に関する正しい情報を入手・活用する力として活かせる

IV 成果と課題

ヘルスプロモーションの概念から整理した本企画の枠組み（図1）を用いて、成果を確認する。看護学生によるケアリングと主体的な健康づくりの支援によって、住民は『健康のことを気兼ねなく聞いたり話したりできて安心した』などの安らぎ感や『生活のほりができた』という生活充実感、『学生に何かしてあげたい気持ちがわいた』『これからも色んなところに出向きたい』という自己実現と意欲と共に、『ウォーキングを生活に取り入れようと思う』健康づくりの意欲も高めていた。これらから、住民の生きがいと健康増進の向上が確認できた。期間中の住民の1人1日平均歩数は、天候の影響を受けて外出できずに数値が下がった週があったが、健康日本21（第二次）の65歳以上の歩数の目標値を常に上回っていた（厚生労働省，2017）。学生の「自分が健康に生活を送る上でどのように活かせるか」の自由記載からは、元気な住民の姿に学生が刺激を受けていたことがわかり、学生の1人1日平均歩数は週を経ることに増加し、健康意識も高められていた。このことから、主体的な健康づくりの支援は、看護学生から住民への一方通行ではなく、住民から看護学生へも働き、相互作用で健康意識や保健行動の実践を高め合っていることが確認できた。

住民に期待される効果では、『自分の知識や体験を学生のために役に立てることができた』で「とても思う」が8名に留まった。これは、もっと役に立つことができたのではないかという不完全感や、役に立っているのか実感がなかったり謙遜により評価が低くなっている可能性が考えられる。また『負担になる気持ちがあった』が「とても思う」「まあまあ思う」あわせて5名いたが、感想では「楽しかった」という記載となっていた。内藤ら（2021）は、地域在住の高齢者を対象にヘルスアセスメント演習を行った結果、高齢者は学修課程である学生とのやり取りに気を遣うことに負

担を感じたが、総合的には生きがいを見出すきっかけになったと報告している。役に立つことである有用感や貢献感は生きがいの要素である（長谷川ら，2004；野村，2005）ことから、次年度は住民が学生に気兼ねすることなく学生の学びに貢献していることを意識してもらおう機会を取り入れていくことを検討する。

学生の学習効果では、『住民の健康の保持増進・疾病の予防を支援する活動について関心を持つ』、『住民が健康への意識を高め行動変容できるための支援を行う』など「とても学べた」が8割に満たない項目もあったが、学生が2年生であり具体的な看護の専門知識や実践方法について学修途上であることが影響していると思われる。「今後の学修にどのように活かしていけるか」の自由記載では、【尊敬の気持ちをもって思いや悩みの寄り添うこと】や【対象の生活や生活背景の理解】から、その人にあった【健康づくりの支援方法】を考えること具体的な記載があり、今後の看護実践に活かされていくことが期待される。

企画内容については、協働活動への満足度は高く、住民・学生ともに評価の高い上位3項目は同じであった。住民は、「健康に関するチラシ」「骨密度測定」に続き「血圧測定」が挙がっていたことから、自らの健康状態の関心や健康づくりへの意識が高いことが推測される。今後の期待として住民・学生から「一緒に歩くこと」が挙げられており、次年度以降の検討課題と考えられる。

昨年度の課題で、住民の積極的な参加が挙がっていたが、今年度は、欠席が少なく、グループで継続した取り組みができた。昨年度の取り組みにより自治会等役員の住民リーダーに、企画の意義を理解してもらえたことや、リピーターが3割いたことなどから、企画の目的や内容を理解して参加してもらえたのだと考える。また、継続して取り組んだことでの変化の1つに、本企画での接点から、地元小学校区の自治会活動として公園で行われている健康体操に看護学生が参加し、健康づくりや安全な環境づくりの活動へと繋がったこと

が挙げられる。ヘルシーキャンパスからヘルシーコミュニティへの第1歩の歩みになっていると考えられる。

看護, 6, 31-39.

利益相反

本報告に関する利益相反はない。

文献

長谷川明弘, 藤原佳典, 星旦二(2004). 高齢者の「生きがい」とその関連要因についての文献的考察－「生きがい」ならびに主観的幸福感との関連を中心に－. 星旦二編著, 高齢者の健康特性とその維持要因, 17-51, 東京: 東京都立大学出版会.

厚生労働省(2017). 健康日本21(第二次)目標項目一覧. https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10601000-Daijinkanboukouseikagakuka-Kouseikagakuka/0000166300_1.pdf (閲覧日: 2023年2月15日)

文部科学省.(2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム. Retrieved from: https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf (閲覧日: 2023年2月15日)

内藤智義, 鈴木みずえ(2021). 地域在住高齢者に対するヘルスアセスメント演習による学生の教育効果と高齢者の経験. 老年看護学, 26(1), 123-130.

日本ヘルスプロモーション学会.(2005). ヘルスプロモーションに関するオタワ憲章. Retrieved from :[https:// https://plaza.umin.ac.jp/~jshp-gakkai/pg181.html](https://plaza.umin.ac.jp/~jshp-gakkai/pg181.html)(閲覧日: 2023年2月15日)

野村千文(2005). 「高齢者の生きがい」の概念分析. 日本看護科学学会誌, 25(3),61-66.

高城 智圭, 井上 深幸, 藤井 聖子(2022). 看護大学生と地域住民が協働で取り組んだ健康づくり－官民学のコラボレーション企画－. 京都